

うたとかたりの対人援助学

第20回 庄司アイさんと「民話の力」

鵜野 祐介

今年（2021年）10月24日、宮城県山元町の民話の語り部、庄司アイさんが亡くなられた。10月上旬に予定していた宮城県多賀城市での「東日本・家族応援プロジェクト」の一環として、「やまもと民話の会」の皆さんにお話を伺いたいと思い、7～8月に電話とハガキで何度かやりとりをしたばかりだった。

2回目の電話の中で、会の皆さんにお声がけくださったものの、コロナをはじめ様々な事情により集まっていただけそうにないこと、アイさん自身も高齢のためこの6月に運転免許証を返納し外出することが少なくなったことなどを理由に、丁寧なお断りの言葉をいただいた。電話の声に、いつものような張りが無いのが少し気にはなっていたが、こんなに早くお別れの時が来るとは思ってもみなかった。

今回は、庄司アイさんの「3・11」から今日までの足跡を、残された言葉を紹介しながら辿ることを通して、「民話の力」について考えてみたい。



（庄司アイさん：京都新聞 2021年3月4日夕刊）

1. 「3・11」まで

庄司アイさんは1934（昭和9）年、福島県相馬市に生まれ、話し好きの母親から民話を聞いて育ち、19歳で辰男さんと結婚、宮城県亶理郡山元町に嫁ぎ、同町の保育所に定年まで勤める。1995年に退職後、自宅に家庭文庫「たんぽぽの家」を開く。1998年に結成された「やまもと民話の会」の中心メンバーとして活躍。「みやぎ民話の会」にも参加。地元の語り手の民話集を編集・出版。2007年、「やまもと民話の会（山元町）」「丸森ざっと昔の会（丸森町）」「新地語ってみっ会（新地町）」で「トライアングルの会」を発足させ、合同研修会を年1回、持ち回りで行う。

2011年3月11日、自宅で津波に遭い、家ごと漂流。自宅と多くの友人・知人を失う（第七回みやぎ民話の学校実行委員会編『2011. 3.11 大地震 大津波を語り継ぐために』みやぎ民話の会、2012、（以下『語り継ぐために』）pp.67-68 他を参照）。

2. 「3・11」の体験

アイさんは夫と、当時中学2年生の孫娘と3人、自宅で被災した。津波が来た時の様子を、5か月後の8月下旬に開かれた「第7回みやぎ民話の学校」では次のように語っている。

…うちの孫娘、ずうっと庭出て、家の定口（家の門口）^{しょうぐち}長いもんだから、そこで荒家の方たち送ったときに、だっこしていたその犬が、キャンキャンって、ゆったんだそうです。そして、「ばあちゃん、津波いー。はやく、はや

く、二階に上がれ。はやく、はやく、はやく」って言って、駆け込む、一生懸命もう。

…わだし、<へっ>と思って、後ろ振り返ったのね、玄関のところにいる。そしたら、一キロぐらい南の方に、常磐自動車学校っていう自動車学校があって、その西のところに、もくもくもくっていうのが、瞬間見いたんです、黒いものが。んでもう、急いで夫を促してね。「はやく、はやく、はやく」って私が言うんでねえ、孫が騒ぐからね。「なにい」って、うちのじいちゃん、夫がね、「なにい」って言って、それも、そんなに急いだふうもなく、二階に上がった。二階に上がって、振り返ったんだそうです。「ああ、あ…もう、二階まで、水来た」ってなったんですね。それで、わだしら、その二階に入って。

孫娘は、すぐにこう、窓から隣の方向を見たいのね。で、隣に横山さんという家あるんだけど、その家族四人と犬が、いま車に乗って出かけた。それに波がかぶった。それで、まあ、うちの孫娘は、「あああ、ばあちゃん」って言ってね、「もう、横山さん家は、だめだあ」って。もう、ほおんとに、仲良くしていた、その犬まで仲良くしていたのにね。それでずいぶん、うちの孫は、心痛めました。いまでも、まだ、その状況から抜け出せないでいます……(同上 pp.72-73)。

3. 『語りつく 巨大津波』の発行

被災から50日くらい経ったある日、やまもと民話の会のメンバーがアイさんの避難先に集まって今後の活動を相談し、証言集の作成を決断。「テープレコーダーも何にもないけれども、私らは新聞に挟まってくる広告の裏紙と鉛筆一本を持って、そっちこっちの友だちやら昔の隣やらの話を記録し、8月、冊子『小さな町を呑みこんだ 巨大津波』第一集を発行。12月に第二集、2012年4月に第三集を発行し、2013年3月にはそれらを合冊・編集した『語りつく 小さな町を呑みこんだ巨大津波』(小学館)を刊行した。

私たちの仲間の大事な一人が津波の犠牲になりました。髪かきむして、泣き叫びたいおもいでおりました。

五月になって、避難生活の私の小さい部屋に集いました。その時、二人の方が退会となりました。十数年、小さな力をあわせてやってきたのに、続行があやぶまれました。やっと、持ち話しもいくつかあって、これからと思った矢先のことでした。残った六人、顔を寄せて、今回の震災体験を語りあった時、私たち自身にも悲壮なパノラマを見るごとく、ドラマがありました。「語りつごう」をあいことばに民話をやってきたこと、……この震災を語りつがなければ、の使命と責任を感じました。

テープレコーダーもない パソコンもない 向かう机もない今だからこそ、真実を伝えられるのでは……(『巨大津波』 pp.20-21)。

「語りつく」なんて、声をあげて、私達の会員の皆で、耳をそばだてて、行動しましたが自責の思いで苦しくなることもしばしばです。まだ、まだ、思い出したくない、語りたくない、語れない人が大勢おりました。「がんばれ」「心を一つに」なんて、私自身も、まだまだ、まぶしいんです。

振り向いて、海を見ました。洋々とやさしい、おだやかな、海です。私を抱擁してくれています。海は見たくないという日も続きましたが、今は向き合うことができます。海と約束します。寄り添って寄り添って生きていくことを(同上 p.119-120)。

4. 「民話の学校」での語り

2011年8月21-22日、宮城県南三陸町ホテル観洋で開催された、みやぎ民話の会主催「第7回みやぎ民話の学校」で自らの被災体験を語った。その全てが翻字されて前述の記録集『語り継ぐために』に収められている。この記録集を通覧して気づくのは、「(会場笑い)」と記されている箇所が何度も出てくることである。例えば以下の通り。

……わだしと夫は、それぞれにテレビ押しえて。ていうのは、テレビ、買ったばかりだったんです、三台もね(会場笑い)。で、わだしは、テレビさわんなくても、犬の

方が大事と思ったんだけど、夫の方がね、「ちゃんとかんでろよお」っていうんです。……あの地震や津波よりも、テレビが大事だったんだと思うのねえ(会場笑い) (『語り継ぐために』 pp.70-71)。

……でも、思い当たるのは、孟宗竹の竹藪が見えたのね。わだし、いつも、そご通勤に通ってたのね、そこの山の裾ね。そうすつと、筍の節になるとね、<あーああ、こおごの山の筍、おいしいべなあ>って思ってね。んでも、よその家の筍だからねえ、どうにもなんないんだけど(会場笑い)。

<こおごの筍、うまそうだなあ>なんて思いながら、走ってたんだけどね。その山があって、<あ、やっぱりこごは、戸花山だ>っていうこと、わかったのね。……グウウッと引き波だったんでしょね。すごいスピードで、東の方に流れたんです。ぐらぐらですからねえ、もう家は。でも…かなりの距離を流されて、そのまま、家の形があるのね。<もしかして、「ノア方舟」?>って、わだしは思ったんですね(会場笑い)……(同上 pp.74-75)。

そこで起きている出来事の深刻さとは裏腹に、5か月後に少し距離を置いて振り返った時に沸き起こった「笑い」の感情をそのまま、相馬の土地言葉でカラッと語っている。シリアスな内容の合間に「笑い」を交え、張り詰めた会場の空気を和ませることで、聴き手たちをより一層深く物語世界へと引き込んでいく。これは、「むかーし昔、あるところに」で始まる昔語りの代表的な技法(レトリック)であり、アイさんが卓越した語り手であったことの証左だが、相馬言葉で語られることによって、なお一層の味わいが醸し出されていることを補足しておきたい。

5. DVD『3. 11を語り継ぐ』

2012年2月、前年8月に「みやぎ民話の学校」で被災体験を語った6人の語り手が同じ内容の話をスタジオで語り、2012年5月にDVD『3. 11

を語り継ぐ』としてKHB 東日本放送から発売された。

アイさんの語りは、vol.2「孫のひとことで2階へ」と題して収録されているが、半年前に「民話の学校」で200人余りの聴き手を前にして語られた、文字化されて『語り継ぐために』に収められたものと内容がほとんど同じであることに驚かされる。まるで民話を語るかのように、時系列に沿って主人公の目線に合わせて出来事が展開する。「キャンキャン」「もくもくもく」「グウウッ」といったオノマトペまで同じである。

一方で、決定的な違いも見えて取れる。スタジオでの語りであり、目の前に相槌を打ってくれる聴き手がないこともその理由だろうが、おそらくはその後の半年の歳月によるものだろう。「みやぎ民話の学校」での語りであった「(会場笑い)」の部分、みんなで一緒にこの悲しみを笑い飛ばして進んでいこうという高揚感がここにはない。

DVDの制作に協力した「みやぎ民話の会」顧問の小野和子さんは、DVDのライナーノーツに次のように記しているが、その言葉は、アイさんのその後の10年の歩みを予見していたかのようでもある。

…一人の語り手がいわれました。「去年の8月の自分と、いまの自分は違っている」と。ごく当然ともいえるこの言葉が含む意味には深いものがあります。つまり、昨年8月時点では、まだ夢中で興奮状態ですらあったものが、時が流れるにつれ、喪失感と寂寥感の果てしなさに、われを失うことがあるのだということです。このことばを裏付けるように、語りがある変化をもたらしていました。その変化のなかに、被災された語り手のみなさんの、これからはじまる本当の苦労を垣間見る思いがします。

6. 「やまもと民話の会」20周年記念の会

2014年8月、山元町の西隣に位置する丸森町で開かれた「第8回みやぎ民話の学校」に参加した私は、そこではじめてアイさんにお目にかかった。バスツアーで、アイさんたちが中心となって建立した戸花

慈母観音や、津波で二階天井までつかりながらも教師たちの的確な判断で屋上の屋根裏倉庫に子どもたちを避難させて無事だった旧中浜小学校跡などを訪れた際、マイクを握りしめて熱心に説明して下さるアイさんの鋭い眼差しが目に焼き付いている。

2017年3月21日、東京学芸大学の石井正己さんが「復興を支える民話の力」をテーマに講演とシンポジウムを行った。そして2018年3月24-25日には、やまもと民話の会発足20周年を記念する「大震災をのりこえ、民話を語りつく」会が、石井さん、小野和子さん、野村敬子さんを発起人として開かれた。私もこの会に参加し、アイさんの語りも聴かせていただいた。この会の翻字記録集から引用する。

去年の4月1日から山元町は、仮設住宅は切り上げて、それぞれ自宅を建設されたり、公営住宅に入ったりと復興が大きく進みました。私も被災者として、また家がすっかり流された者として、一番の目的が自分の家へ入ることだったんです。私も山の方を買って開墾して、そこに小さな家を建ててこじんまりと今暮らしておる所です。本当に山元町の方たちも、このお家うちに入れたという大きな壁を乗り越えてとても安心して、「ああ、よかった」と思っています。

ところが、被災地のね、共通の悩みでしょうか。孤独に耐えられないなあと思っている方、それから家族が分離したり家族をなくしたりした方、それから、なかなか隣近所のコミュニケーションの取れない方の心の叫びが、私の胸に突き刺さっています。おそらく、被災地どこも同じでないかなあと思うんです。私たちは、心の復興についてはまだまだ勉強が足りませんが、今まで民話をやってきて、そっちの学校やこっちの老人会なんかに行って、昔話やわらべ歌で遊んだりしました。

それがね、思ったより反響があるんですね。わあっというまに「花いちもんめ」をやったり、そうかと思うと、そういう昔話があるのかとしくしく泣いて涙をこぼしたり、私たちの語る民話っていうのは、大事なものでないかなあって、このごろ特に思っておるんですけれども、

実際には、語る人が少なくなったし、語りの場も少なくなって、しぼみがちなんですね。でもね、心の復興の問題がおそらく東北、この浜通りではいっぱいあると思うんです。そんなときにね、民話を通してみなさんに元気をおあげできればいいんじゃないかなあと思うんです。民話には力があるんですから。

……六十代のころ、私は民話に力があるなんて思わなかったんですよ。それで、小野先生やみやぎ民話の会の皆さんのご指導を受けて、「民話の力」を私なりに受けとれたころ、この大震災に遭ったんです。私はこの震災を体験して、「民話の力」を知りました。「民話は、命を生み出すものであり、民話は、命をはぐくむものだ」ということを。私は、今日ここでみなさんと確認したいと思います(石井正己・やまもと民話の会編『復興と民話 ことばでつなぐ心』三弥井書店2019, pp.79-80)。

7. 「震災10年 思いを刻む」

今年(2021年)3月4日、京都新聞夕刊にアイさんが紹介された。「震災10年 思いを刻む ③民話語り部@宮城・山元」という記事は、以下のように締め括られている。

震災の約2年後、町内陸部に転居した。大切に育てていたトクサやツワブキの根をかつての庭から掘り起こし、新居に植え直した。「夫は『雑草だ』って言うんだけどね」と冗談めかしつつ、その目は「震災の記憶もこの草同様に受け継ぐ」と語っているようだった。

今年8月2日付のアイさんからの最期となったハガキには次のように記されていた。「…東北に寄りそっていただいていることに感謝申し上げます。…本当にたくさんのご厚情ありがとうございます」。

アイさんから受け継いだ「民話の力」というバトンをしっかり次の世代に届けていくこと、それが私たちの使命であり責任であると改めて感じている。

アイさん、本当にお疲れ様でした。どうかゆっくりお休みください。合掌。